

第3回人間作業モデル全国事例検討会のご案内

これまで、人間作業モデル(MOHO)に関心を持つ各地の方々が集まって事例検討会を実施してきましたが、昨年の3月から全国の関心を持つ方々を対象にMOHOの事例検討会を開催することになり、実施してきました。今回で3回目になります。開催もリモートで行いますので、どこからでも参加できますので、どうぞご参加ください。発表する方は下記の3名です。要旨が書かれていますのでご覧ください。

日時：1月20日(土)13時～17時 参加費：一般4,400円、賛助会員・学生3,300円
発表時間 20分 質疑 30分 ミニレクチャーがあります

参加する方はホームページの事例検討会からお申し込みください。参加者には当日までに発表のパワーポイントをお送りしますので、ご覧ください、質問をしてください。
なお、OT協会のポイントが付きます。

OPHI-IIとOQにより服薬管理やサービスの検討につながった事例

～急性期における高齢糖尿病患者へのMOHOの活用～

千葉県循環器病センター 作業療法士 菅生春葉

A氏は2型糖尿病を患う70代男性である。今回、怠薬などによる自己管理不足から糖尿病性ケトアシドシスを発症し、当院入院となった。介入当初「何もできない」と抑うつを示し、作業への動機づけは低下していた。OPHI-IIでの日課の語りから、病前はパソコンで服薬管理表を作成し管理していたが、パソコンが故障し出来ていなかったことが明らかとなった。A氏と協業し服薬管理表を作成、服薬管理獲得へ向け介入した。また、OQを用いて作業パターンや価値を明らかにし、退院後の不安や課題を話し合った。その結果、服薬管理の獲得や退院後サービスの検討につながった。退院後について明るい見通しが持てるようになり、自宅退院に至った。

過去の余暇活動を提供したことで、夫役割を想起させ、自宅退院の意味を見いだした事例

飯能靖和病院 富田 耕平

本事例は発症約2か月前に妻を亡くし、活動意欲を失っていた。入院後リハビリ拒否が強く「家に帰る意味はない」と自宅退院を望まなかった。そこで人間作業モデルを用いて過去の余暇活動を提供した結果、個人的原因帰属に変化を認め「早く家に帰りたい」と希望を示した。入院中の発言や退院時の様子から提供した過去の余暇活動が夫役割への再認識と

再獲得につながっていたと考えられた。そこで夫役割を想起させ、そのことが意志に影響を与え、リハビリへの継続的な参加につながり自宅退院への意味を見いだしたと考えられた。

母親としての役割の再認識により、行動が変化した事例～自宅から施設退院に向けて～

丘整形外科病院 大貫美空

今回、右大腿骨転子部骨折を受傷した娘と2人暮らしをしている本事例は入院後、全身状態の悪化に加えてリハビリ拒否が強く「歩いて帰ればいい」と自己能力を過大に評価し、リハビリの進行が滞っていた。そこで人間作業モデルを用いた全体像の把握にて意志と習慣化を問題点として明確にした。娘様との面会、失敗体験や同室者の退院を契機として習慣に対しての介入をした結果、個人的原因帰属・習慣化に変化を認めた。娘様との面会を通して過去の強く頼れる母親的役割から価値としての母親的義務感へと変化し、リハビリに意味を見出したことで行動に変化がみられ、今後の生活に対する期待も持てるようになったのだと考えられた。